

特集

若者 NEXT 10 Years

目的

「私たち(YS協会)は、○○をしています」という
現在進行形の取組紹介だけでなく、

「私たち(YS協会)がめざす社会は、どんな社会なのか？」

「私たち(YS協会)は、何を担う(担える)のか？」

「私たち(YS協会)は、何に取り組むのか？」

という**ビジョンを明確**にして発信します。

このことが市民からの理解・賛同を得て、
支援者の拡大、寄付につながると考えます。
同時に、議論を重ねるプロセスを通して
職員間での相互理解を深め、
意識の共有をはかることをねらいとしています。

これまでの 経過

2018年 6月 職員全体研修会で意見交換を行いました。

9月 「ユースシンポジウム2018」のテーマに設定
「若者未来構築計画(仮)5年後、どんなオトナになりますか？」
若者を中心とした参加者同士で意見交換を行いました。

11月 若者文化発信事業「ユスカル！」にブース出展
「あなたは、どんな大人になりたいですか？」
「あなたは、どんな未来を作りたいですか？」
上記テーマについて、ユースワーカーから声かけをする
形で、来場者の意見聴取・意見交換を行いました。

今年度、京都市ユースサービス協会(以下、YS協会)は設立30周年という節目を迎えました。若者がさまざま
な経験を積み重ねながら成長するのと同じく、私たちの組織もさまざまな経過をたどりながら、成熟してい
く時期なのかもしれません。

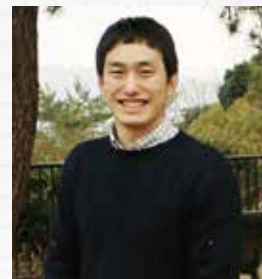
30歳を迎えた組織として、まずは自分たちのポリシーを明確にする必要があると考えました。YS協会設立
当時から、社会情勢は大きく変化しています。社会から求められる役割や、YS協会が果たす責任もおのずと変
わってくるはず。社会情勢はグローバル、かつスピーディに移り変わる現在、先のことを見通すことは困難
になっていますが、あえて10年後のユースサービスを見据えたビジョンを作成・発信することで、中長期の見
通しを持った活動ができるのではないかと考えています。

そこで私たちは今年度1年をかけて、『Next10Years』と題してビジョンを考えて発信していきます。
今回の特集では、2019年1月に行ったYS協会職員によるワークショップについて報告します。

ぷちメッセージ

「私のきっかけ」

紫野カルチャー亭運営協議会
事務局長・フナツ 代表



石川智規

私と北青少年活動センターの出会いは19歳のとき、一枚のチラシ
でした。大学掲示板に張り出された「まちづくりワークショップ」の文字
を見て、面白そう！ けど、全5回のうち1回目は終わっている！ どう
しよう？ とりあえず電話だ！ と参加したのがきっかけです。その
後、参加者同士で意気投合し、船岡山公園の活性化を目指して、ま
ちづくり活動グループを結成しました。

手探りで始めた活動で、企画したイベントに人が集まらない等、たく
さんの失敗を経験しました。サポートしてくれたユースワーカー、同世
代の仲間たち、そして地域で受け入れてくださった皆さんと過ごした
日々が楽しくて、気づいたら10年を越えて活動が続いています。現在
は、紫野学区社会福祉協議会と、母校で職員として勤めている佛教
大学の学生と協働し、一人暮らし高齢者の会パープルフレンズのサ
ポートや、地域活性化に向けた取り組みを進めています。

ふと、思うんです。あの時、チラシを見てなかったら、今の私はいな
いんだろうなと。たった一枚のチラシがきっかけで、新しいワクワクが
始まるかもしれません。興味を持ったことには、ぜひチャレンジしてみ
てください。細く長くお付き合いできるライフワークを見つけてくださいね。
(北青少年活動センター運営協力会 委員)

contents

- 3 特集
若者×NEXT 10Years
- 8 高校生が作ったページ
高校生が「平成」について考える
- 10 シリーズ
はたらく若者
- 12 TOPICS
アナログゲームvsデジタルゲーム
- 14 ユースかわら版
「若者が“ときめく”
社会の実現に向けて」ほか

ユースサービスの理念

子どもから責任ある大人へと成長する青少
年を支援しています。
家庭、学校、地域社会、職場ほか、青少年が
自主的な活動場面への参加を通じて、社会と
交わり、自身の興味や関心を豊かにし、必要に
応じて、助言、情報、または多様な人的・物的
資源が得られるような機会を提供します。

◆ お知らせ ◆

YOUTH
SERVICE **別冊**

2019年2月
\\ 発行 //

1,000 円(税込)

いつもご愛読ありがとうございます。

この度、広報誌別冊 YOUTH SERVICE
を発行しました!!

シリーズ『ユースワーク』から
価値を考える。

京都市ユースサービス協会事務局にて販売中!

< お問い合わせ > TEL: 075-213-3681 E-mail: office@ys-kyoto.org





文化に触れる機会が溢れている社会

文化に触れる・発信する機会が増えることで、若者自身の中にある生きる上での選択肢が豊かになり、多様な選択をすることが可能になると考えます。しかしながら、文化に触れるためにはある程度お金が必要となる場面もあります。経済的な問題のせいで若者が自らの可能性に限界を感じないように、さまざまな経験ができるようなつながりや機会を作っていく必要があります。

人に頼ることのできる社会

20～30年前の企業のように「会社に入ってからじっくり育てる」ような時代ではなくなりつつあります。生産人口が減少する一方で、ICTの活用、AIの進化など、今までとは異なった新しい働き方が一般的になるでしょう。その中でしんどい人はその時代ごとに出てくるでしょう。時代ごとに変化するしんどさの中で、そのことに一人に対応するのではなく、誰かに頼れるようになることは大切です。そのためにも若いうちに相談するという経験を話すことは重要ではないでしょうか。



「私たち(YS協会)がめざす社会はどんな社会なのか？」

『ユースシンポジウム2018』や『ユスカル!』で集まった様々な意見をもとに、10年後のビジョンを作るために、YS協会の職員が集まって、1月にワークショップを行いました。



多様な人とつながることのできる社会

インターネット上だけでのつながりだけではなく、直接的な人とのつながりを通して、若者が成長と学びを得ることのできる社会をめざします。「若者のために力を使ってください」という一方的なお願いではなく、大人も若者も、お互いに成長しあえる関係を作りたい。そのために、支える側と支えられる側の一方通行なつながりではなく、お互いに支え合い、学び合いのできる仕組みを作ります。



障がい(特性)があっても自由に過ごせる社会

「他の人と違う・普通ではない・少数派だ」などの理由で、生きにくさを感じることはない生活を誰もが送ることができる社会を目指します。障がいの有無に関わらず、自らの選択で働くことができ、思うままに過ごすことができる社会をめざします。



京都市の人口140万人がユースワーカーのような意識・スタンスで他者と関われるような社会



生まれた環境や育ちに
左右されない

自分で選ぶ、
決めることができる

お互いを
認め合う

これらはみんなユースワーカーが大切にしていることです。しかし、これらのことは、ユースワーカーだけが大切にしているてもダメだと思います。この雰囲気社会全体に広がればいいのではないでしょうか。だからといってみんなが同じように関わることも違うように思います。

例えば私たちユースワーカーは「こんなことをしたい！」とやってきた若者に対して、「なんでもオッケー」ではなく「もっとこうしないと無理なんじゃない？ やめとき」というユースワーカーもいれば「いいやん！ じゃあどうやってできるか考えようか」というユースワーカーもいます。どちらかだけでなく、どちらも大切な関わりだと思います。ただし、ちゃんと若者のことを考えて意見を言うことが大前提！ そんな関わりを大切に人たちがたくさんいる社会をめざしたいです。



若者の挑戦を応援できる社会

必要としていることを自らの言葉で発信できる若者もいれば、できない若者もいます。“言葉にならない想い”も含めて、彼らが“必要としていること”や“挑戦したいこと”を的確にキャッチすることが大切です。困りごとが表面化する以前、あるいは課題が明確になる以前に行う働きかけは、大人からは理解されにくいこともあります。大人の価値観や評価基準でとらえるのではなく、若者の立場・視点に立ち“想いに応える”“想いを後押しする”ことが重要です。



他にもこんな意見が出ました！

働き方を
選べる社会

不安がなく、
やりたい事が
できる社会

お金がなくても
楽しいと
思える社会

自己肯定感が
持てる、存在が
認められる社会

こうあるべきだ！
という目的や
ビジョンがなくても
認められる社会

さて、めざす社会に関してはいろいろな意見が出ました。

この後は、それを実現するための具体的な行動を考えていく必要があります。

これがなければ、ただの夢に終わってしまいます。

皆さんは、どんな社会をめざしますか？

私たちと、一緒に考えてみませんか？

ご意見を頂ければ嬉しいです。

ユースワークがめざす10年後の社会のヒントについて、

青少年教育や体験活動について実践や研究を重ねている

青山鉄兵さん(文教大学人間科学部准教授)に伺いました。

スウェーデンで見えてきたもの



昨年11月、いっそうに太陽が姿を見せない薄暗いストックホルムに滞在し、彼の地のユースワークを視察する機会に恵まれた。

おしゃれなユースセンターを見たり、素敵な職員と出会うことができたのは有意義だった。しかし、1週間にわたる視察で一番印象に残ったのは、そうした現地の先進的な施設やワーカーのあり様ではなく、むしろ、その前提となるユースワークと社会の関係だった。

一つは、訪問する先々で、ユースワークの土台となる価値として「民主主義」という言葉を何度も聞いたことだ。若者も、ワーカーも、ユースワークについて語る時にはいつも「民主主義」を口にしている。実践の目的を聞けば「若者が民主主義を学ぶこと」が挙げられるし、ワーカーの養成課程にも「民主主義の理解」が位置付けられていた。このスウェーデンの「民主主義」をどう理解するか、ということは今後の大きな宿題なのだが、少なくともスウェーデンでは、「民主主義」は教科書の中だけにある言葉ではなく、一人ひとりの自由で多様な生き方を尊重しながら社会を作っていくための共通の理念として位置づいており、こうした理念に基づくことが、ユースワークの前提(スタート)でもあり、目標(ゴール)でもあると捉えられているようであった。ユースワークに携わる人に、ユースワークの土台となる価値が共有されていることや、そうした価値のもとで施設の運営やワーカーの養成がなされていることがとても印象的だった。

もう一つは、若者の余暇に対する社会の信頼を感じたことだ。訪問先のあるスタッフは「ユースセンターで何が起るかを決めるのは自治体であり、住民であり、納税者だが、こういった活動が残っているのは、『余暇』という価値が認められているからだ」と述べていた。ここでの「余暇」は、単に学校や仕事以外の時間のことではなく、その時間に内在する「自由」や「遊び」にこそ意味があるものだろう。近年、ユースワークの周辺にも「費用対効果」や「エビデンス」やら「課題解決能力」といった「生産的」な言葉が溢れる中で、若

者の余暇を余暇として尊重することは容易ではない。しかし、生産性や効率性を土台とした学校や社会のあり方自体が若者の生きづらさの背景にあることを思えば、こうした余暇に対する信頼が社会に共有されていることがとても貴重なことに感じられた。

さらに重要なのは、ここでの「民主主義」と「余暇」は別々のものではない、ということだろう。スウェーデンの若者団体における自治へのこだわりを見ると、民主主義は、自分たちの余暇(自由)を自分たちで守るための仕組みでもあることに気がつくされる。ここでは、余暇の中で民主主義が育まれ、民主主義の中で余暇が余暇として守られている。

スウェーデンのユースワークにもさまざまな課題があるし、向こうのやり方が全て素晴らしいというつもりもない。ただ、ユースワークがめざす10年後の社会を考えると、スウェーデンにおけるユースワークと社会の関係には、さまざまなヒントが含まれているように思う。

青山鉄兵(文教大学)